44　近世イギリスにおける偽医者の文化と演劇

遠藤　花子
実践女子大学 文学部英文学科

16世紀から17世紀にかけてのイギリス各地のマーケット・プレイスでは，インチキな薬を売り歩いたり，医者の行為を真似たりする，“Quacks”と呼ばれる偽医者が存在した．彼らの存在と治療は悪いイメージが定着しつつあったが，実際に彼らが行った行為はネガティブな面ばかりではなかった．現に，バフティンはそのような偽医者をマーケット・プレイスの笑いをさそうものと考えている．また当時の人々の娯楽の一つであった演劇においても，舞台となっているマーケット・プレイスに偽医者が登場する場面が見受けられる．本発表では当時の偽医者について調査すると共に，偽医者が登場するシェイクスピアの『間違いの喜劇』とベン・ジョンソンの『ヴォルポーネ』も考察する．

歴史的に偽医者をみてみると，早くも1382年にはロンドンで確認されている．しかし，1511年のヘンリー8世の時代に医療や外科的な行為を行う偽医者を規制する法律が施行され，不十分な治療や偽造した水を売った者には罰金を科したり勧告が与えられたりしたため，17世紀までに彼らは悪者扱いされるようになる．「偽医者は悪者」という概念が広まっていた一方で，親切で技術を持った良い偽医者が存在していたことも事実である．彼らの中には高い治療技術を持つ者，実際の医者が治せない病気を治療できた者など，有名な偽医者も存在し，彼らを規制する法律とは裏腹に，法的な免許が与えられた偽医者もいた．

偽医者の多くが医療行為を行っていたのは各都市のマーケット・プレイスである．当時のマーケット・プレイスは人々が売り買いを競い合う場所であり，人々の生活と経済の中心であった．また，ペストの流行などから病気に対する人々の関心も高まりつつあったため，人々の集まるマーケット・プレイスは，偽医者が効き目のあるものと信じ込ませて，薬草や化学薬品を売ってお金を稼ぐ絶好の場所でもあったのだ．

『間違いの喜劇』には，ドクター・ピンチというマーケット・プレイスで無責任な治療を行う偽医者が登場する．彼は，当時の免許を持った医者のように，脈拍を調査や表情の観察を行う．脈を調べることと患者の表情をみることは，16–17世紀の内科的診察として，尿を調べることと同様によく行われていたことである．また，ドクター・ピンチはthe College of Physiciansでの主な教育であったガレノス医学に基づいた体液のことも述べている．体液論は，この時代最も重要視されていた治療方法であり，免許を持つ医者なら誰もが言及したことである．この点からみる限り，ドクター・ピンチは医者としての機能を果たしているかに見えるが，口先だけだったことが見破られ，笑い草となってしまう．

『ヴォルポーネ』の主人公もまた，マーケット・プレイスで声を張り上げている一人である．ヴォルポーネは薬売りとしての偽医者を演じると同時に，大道芸人としての存在感も大いに見せている．パラセルサス医学の知識も披露するが間違いを犯すなど，彼もマーケット・プレイスで歓声を上げることにより聴衆の笑いを一層誘っているのである．

バフティンは，偽医者はマーケット・プレイスの役者であり，大勢の人々を楽しませることのできる祝祭的な存在であると言っている．それは，社会には階級や様々な礼儀作法があったが，マーケット・プレイスでは言葉の遠慮はなく，自由な雰囲気に満ちていたことが理由の一つである．どんないい加減な医学の知識も，マーケット・プレイスでは笑いの種の一部となり，祝祭的なイメージが治療力に貢献し得るのである．例え，当時の人々に悪者扱いされていようと，偽物の薬を売ろうと，偽医者は人々の生活の中で笑いとなり，また，人々が偽医者を頼りにしていたことが，偽医者の歴史の中から，バフティンの理論の中から，また当時の劇の中から読み解くことができると言えるのではないだろか．